芥川竜之介『西方の人』注解（八）

R. Akutagawa's "SAIHO NO HITO" EXPlanolory Notes (Ⅷ)

中野恵海
吉田孝次郎

7　クリストの財布①

かう云ふクリストの収入は恐らくはジヤアナリズムによつてゐたのであらう。が、彼は「②明日のことを考へるな」と云ふほどのボヘミアンだつた。③ボヘミアン？――我々はこゝにもクリストの中の共産主義者を見ることは困難ではない。しかし彼は兎も角も彼の天才の飛躍するまゝ、明日のことを顧みなかつた。④「ヨブ記」を書いたジヤアナリストは或は彼よりも雄大だつたかも知れない。しかし彼は「ヨブ記」にない優しさを忍びこます手腕を持つてゐた。この手腕は少からず彼の収入を扶けたことであらう。彼のジヤムアナリズムは十字架にかゝる前に正に⑥最高の市価を占めてゐた。しかし彼の死後に比べれば、――現にアメリカ聖書会社は神聖にも年々に利益を占めてゐる。……

（注）

①財布　経済とか、経済生活という程の意であろう。

②「明日のことを考へるな」　マタイ伝・第六章・三十四に「是故に明日の事を憂慮なかれ明日は明日の事を思わづらへ一日の苦労は一日にて足り」とある。

③ボヘミアン　bohemian（英語）俗世間のおきてを無視して放浪的な生活をする人。放浪者。本篇ではほかに「ボヘミアン的精神」（正篇9）「古代のボヘミアン」（正篇14）「ボヘ

ミア的生活」（続篇・15）等の用語が見える。

④「ヨブ記」　約百記（Book of Job）旧訳聖書中の一書。ヨブという敬虔な篤信者の苦悩について記す。詩的な文意で有名。

⑤ジャムアナリズム　はジャアナリズムの誤。

⑥最高の市価　正篇・27「イエルサレムへ」参照。キリストがメシア（救世主）と呼ばれ、十字架にかかる前、群衆より「ホザナよ、ホザナよ」（救いたまえ）と呼び立てられた事を指す。

（解）

こんな〔生活での〕クリストの収入〔源〕は恐らくは〔大衆に対する教化活動など、つまり〕ジャアナリズム〔と名づけるべきもの〕によっていたのであろう。が、彼は〔マタイ伝で〕「明日のことを考へるな」と云う程のボヘミアン（放浪者）だった。ボヘミアン？――〔そう云えば成る程〕我々はここにもクリストの中に共産主義者〔的要素や性格〕を見つけることは困難ではない。しかし〔それらのことはさておいて〕彼はとにもかくにも〔ひたすらに〕彼の天才の飛躍するまゝに、明日の〔生活の〕ことを顧みなかった。「ヨブ記」を書いたジャアナリストは〔作者末詳という事であるが、ジャアナリストとして〕或は彼クリストよりも雄大だったかも知れない。しかしクリストには「ヨブ記」にない優しさを〔派手なやり方でなく〕人々の心に泌みこませる手腕を持っていた。この手腕はすくなからず彼の収入（経済）をたすけたことと思われる。

彼のジャムアナリズムは生命を終える十字架を前に〔した時〕正に最高の市価を獲得していた。しかし彼の死後に比べれば、〔問題ではない〕――現にアメリカ聖書会社は〔神聖の看板をかかげ、神聖をよそおい、つまり〕神聖にも年々に利益を占めている。……〔なんとも不合理な話ではないか。〕

（要旨）

ジャアナリズム至上主義のクリストの収入源はその著作であったと考えられる。大体、彼は「明日のことにクヨクヨするな」と説くほどのボヘミアンで、こうしたところにも（第3章で述べた以外にも）共産主義者の一面を見得る訳だが、それはともかく、彼は明日の生活を顧慮せず、ひたすら天才の飛躍のままに著作活動に専念した。彼は「ヨブ記」の作者ほどの雄大さはなかったかも知れないが、「ヨブ記」に欠けている優しさを作品にしみこませる文才にたけていて、この独特の手腕が彼の収入に大きく役立ったことと思われる。彼の作品は彼が十字架にかかる頃にはまさに最高の市価を占めていた。これは納得できるが、それにしても彼の死後に比べれば何という馬鹿馬鹿しくもやりきれない事か。　共産主義者で優しいクリストが生命と引き換えたその作品によって、今ここに一例を挙げると、つめたい資本主義的経営に専心するアメリカ聖書会社は「神聖

にも」（反語的表現で、真意は『神をはばからず』）年々巨利を占めているのだ。言語同断の限りというしかない。

以上が本章の要旨であるが、芥川はすでに「侏儒の言葉」の中で、作者が自己の全存在をかけた作品を私腹を肥やすための魂なき商品と同一視して恥じない資本家の横暴さ、野蛮ぶりについてつぎの様に資本家に言わせている。

「芸術家の芸術を売るのも、わたしの蟹の罐詰めを売るのも、格別変わりのあるはずはない。」（同上「ある資本家の論理」）

8　或時のマリア

クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。彼の伝記作者の一人――ルカの語る所によれば、①「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後殿にて遇ふ。彼教師の中に坐し、聴き且問ひゐたり。聞者皆其知慧と其應対とを奇しとせり。」それは論理学を学ばずに論理に長じた学生時代のスウイフト②と同じことである。かう云ふ早熟の天才の例は勿論世界中に稀ではない。③クリストの父母は彼を見つけ、「さんざんお前を探してゐた」と言った。すると彼は存外平気に「どうしてわたしを尋ねるのです。わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」と答へた。④「されど両親は其語れる事を暁らず」と云ふのも恐らくは事実に近かたであらう。けれども我々を動かすのは⑤「其母⑦こらの凡の事を心に蔵めぬ」と云ふ一節である。美しいマリアはクリストの聖霊の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の為にヨセフに恥じなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に――或は人気のない夜中に突然彼女を驚かした精霊の姿も思ひ出したかも知れない。⑧「人の皆無、仕事は全部」と云ふフロオベル⑨の気もちは幼いクリストの中にも漲つてゐる。しかし大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い⑩「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであろう。

（注）

①「其子イエルサレムに……」　ルカ伝、第二章・四十三～五十一に「其子イエスイエルサレムに留りぬ然るにヨセフと母これを知ず『同行人の中に在ならんと意ひ一日程を行て親戚知音の者に尋しが遇ざりければ彼を尋てエルサレムに返り』三日ののち殿にて遇かれ教師の中に坐し且聴かつ問ゐたり聞者みな其知慧と其應対とを奇とせり両親これを見て駭き母かれに曰けるは子よ何ぞ我儕に如此行たるや爾の父と我と憂て爾を尋たり　イエス答けるは何故われを尋るや我は我父の事を務べきを知ざる乎然ど両親は其語る事を暁ずイエスこれと共に下りナザレに帰て彼等に順ひ居り其母これらの凡の事を心に蔵ぬ」とある。

右聖書の本文中の『印の部分（四十四節）』を芥川は省略してこの章に引用していると思われる。

②スウイフト　Jonathan Swift(1667～1745)イギリスの作家。深刻な政治的諷刺に長じた。愛人の死後、発狂におびえ、廃人同様に晩年の十五年間をすごし、枯木の朽ちるように七十八歳の生涯を閉じた。芥川の作品では他に「或阿呆の一生」（昭和2年6月・遺稿）の「四十六　謔」や「侏儒の言葉」（大正12年～昭和2年）の「人間らしさ」に出て来る。

③クリストの父母は……右の注①に引用。

④されど両親は……　右に同じ、注①

⑤其母これらの……　右に同じ、注①

⑥わたしのお父さんのこと……　マタイ伝第二十三章・九に「地にある者を父と称ること勿れ爾曹の父は一人すなわち天に在す者なり」とある。

⑦こらの　注①の引用文にある如く、これらの誤りであろう。

⑧人の皆無、仕事は全部　角川版・大係本38巻の頭注（頁四四三）によれば、フローベルのジョルジュ・サンド宛書簡（一八七五年十二月）の中に、「芸術上の理想として、私は自己の怒りを少しでもさらけ出してはならぬと信じています。芸術家はその作品の中で、神が自然における以上に現われてはならぬと思っています。人間とは何物でもない。作品がすべてなのです（略）私だって自分の思ったことを言い、文章によってギュスタフ・フローベル氏を救ったらずいぶんいい気持ちでしょう。だがこの先生にいったい何の価値があるのでしょう。（略）」とある。

⑨フロオベル　Gustave Flaubert（1821～1880）フランスの小説家。フランス写実主義小説の祖、また、自然主義文学の先駆。観察・考証の精緻と文体・形式の彫琢とを特色とする。作品に「ボヴァリー夫人」「感情教育」「聖アントワーヌの誘惑」などがある。

⑩涙の谷　旧約聖書・詩篇第八十四篇・6章。天国に対し、苦難に満ちた現世をさす。正篇「2　マリア」参照。

（解）

クリストは〔聖書によれば〕もう十二歳のときに〔既に〕その天才を示していた。〔即ち〕キリストの伝記作者の一人、―ルカの語るところによれば、「その子（イエス）イエルサレムに留りぬ。しかるにヨセフと母（マリア）これを知らず、三日の後殿にて遇う。彼（イエス）教師の中に坐し、聴き且問いいたり。聞く者皆その知慧とその応対とを奇しとせり。」とある。これは論理学を学ばずに論理にすぐれた学生時代のスウィフトと同じことである。こういう早熟の天才の例は勿論、世界中稀なことではない。〔この時〕クリストの父母は彼を見つけて、「さんざんおまえを探していた」と言った。すると彼は案外平気に「どうしてわたしをさがすのです。わたしはわたしの〔真実の〕お父さんのことを務めなければなりません」と〔謎のよ

ような〕答えをした。〔聖書に〕「されど両親はその語れることを暁らず」とあるのも恐らくは事実に近い表現であったであろう。けれども我々を感動さすのはその次の「その母これらのすべてのことを心に蔵めぬ」という一節である。美しいマリアはクリストが聖霊の子供である事を承知していた。〔この事が明らかに感じられる〕この時のマリアの心もちは〔人の子の母として〕いじらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉のために〔養父になって貰っていることで〕ヨセフに恥じなければならなかったであろう。それから彼女自身の〔私生子を生んだ〕過去も考えなければならなかったであろう。そして最後に――あるいは人気のない夜中に突然彼女を驚かした聖霊の姿も〔生々しく〕思い出したかも知れない。「人は皆無、仕事は全部」（作者、人間などはどうでもよい。作品がすべてである。）と言う〔芸術至上主義者の〕フロオベルの気持は〔この〕幼いクリストの中にもみなぎっている。しかし大工の妻だった〔現世の〕マリアはこのときも薄暗い、苦難にみちた人生に向かい合わなければならなかったであろう。

（要旨）

前章で、クリストのジャアナリズムの魅力として「優しさを忍びこます手腕」を挙げ、また続4章でクリストの「柔らか」な持ち味に心ひかれる自分を示している芥川は、本章において「超えんとする」子、クリストに対する「守らんとする」母「美しいマリア」の心情への同情を中心にしながら、両者の懸隔ぶりに深刻に引き裂かれた自己の内面を吐露している。芥川は前にも（正篇第17章で）クリストに顧みられない「美しいマリア」の苦しみに共感を示している。そればかりでなく、クリスト自身も「天国の門を見ずにありのままのイエルサレムを眺めたときには」「ときどきはマリアを憐れんだであろう」と記して、マリアを嘆かせるクリストに、その章の題「背徳」の宿命を思わずにはいられなかったのである。クリストの絶対主義的生き方を惚恍しつつも生存する限り、現実苦に耐えて生きるマリア的生き方に同情共感を禁じ得なかった芥川の心情がうかがわれる。「美しい」というマリアへの形容の性質はこの地上的忍従に生きることを意味するものであり、それが「我々を動かす」「いじらしいと共に哀れ」なのであろう。早くから虚無的傾向をいわれていた芥川が、こういう地上的相対的な人間らしさに引かれ動かされる心情の持主であったこと、そして、それ以外にまともな生存の意味を認められない人であったことは、つぎの「人間らしさ」の文章にも察しられよう。

「わたしは不幸にも『人間らしさ』に礼拝する勇気は持っていない。いや、しばしば『人間らしさ』に軽蔑を感ずることは事実である。しかしまた常に『人間らしさ』に愛を感ずることも事実である。愛を？――あるいは愛よりも憐憫かもしれない。が、とにかく『人間らしさ』にも動かされぬようになったとすれば、人生はとうに住するに堪えない精神病院に変りそうであ

る。」（「侏儒の言葉」）

9　クリストの確信

クリストは彼のジャアナリズムのいつか大勢の読者の為に持て囃されることを確信してゐた。彼のジャアナリズムに威力のあつたのはかう云ふ確信のあつた為である。従つて彼は最期①の審判の、――即ち彼のジャアナリズムの勝ち誇ることも確信してゐた。尤もかう云ふ確信も時々は動かずにゐなかつたであらう。しかし大体はこの確信のもとに自由に彼のジャアナリズムを公けにした。②「一人の外に善者はなし、即ち神なり」――それは彼の心の中を正直に語つたものだつたであらう。しかしクリスト彼自身も「善き者」でないことを知りながら、詩的正義の為に戦ひつゞけた。この確信は事実となつたものの、勿論彼の虚栄心である。クリストも亦あらゆるクリストたちのやうにいつも未来を夢みてゐた超阿呆の一人だつた。若し超人③と云ふ言葉に対して超阿呆と云ふ言葉を造るとすれば、……

（注）

①最期の審判　世の終に人類が神によって裁かれること。原始キリスト教で、イエスが再臨し千年間支配の後、死人の復活があり、全人類が裁かれて善人は永遠の祝福に、悪人は永久の刑罰に定められるとの思想。

②「一人の外に善者は……」　「マタイ伝」第十九章・十六十七に「或人きたりて彼に曰けるは善師よ我かぎりなき生を得んが為には何の善事を行べきか彼に曰けるは何故われを善と称や一人の外に善者はなし即ち神なり若し生命に入らんと欲はゞ誡を守るべし」とある。

③超人　ニーチェの「超人」思想から来た言葉。正篇24章参照。

（解）

クリストは彼のジャアナリズムがきっといつか大勢の読者たちによってもてはやされるということを確信していた。彼のジャアナリズムに威力があったのはこのような確信が〔彼に〕あったせいである。したがって彼はまた〔その総決算である〕最期の審判が――即ち彼のジャアナリズムが勝ち誇ることも確信していた。もっともこのような確信も時々は動揺せずにはいなかったであろう、が、しかし大体〔のところ〕はこの確信のもとに〔彼は〕自由に彼のジャアナリズムを公布した。「マタイ伝」にある彼の言葉「一人のほかに善者はなし、すなわち神なり」――それは彼の心のなかを正直に語ったものだったであろう。然しクリストは彼自身も「善き者（神）」でないことを知りながら、〔彼の神〕詩的正義の為に戦いつづけた。〔必らず最後に勝つという〕この確信は事実となった〔から良いような〕ものの、勿論〔それは〕彼の虚栄心である。〔つまり、十字架

にかけられると知りながら避けることをしなかったのは彼の、身の程知らずの英雄ぶりであった。〕〔つまり〕クリストもまたあらゆるクリストたちのようにいつも未来を夢みていた〔手のつけようのない、非常識な〕超阿呆の一人だった。もし、〔ニーチェのつかった〕超人という言葉に対して超阿呆という言葉を造るとすれば、……

（要旨）

前章で、芥川が幼いクリストの中に観じた「人の皆無、仕事は全部」的精進を支えていたものは何かを本章で考察する。それは自分の作品がいつかは世界の読者にもてはやされるという、最後の勝利を意味する確信であったとする。そしてその確信は、唯一の絶対者――「善者」である「神」を創り、信じ、その絶対者のために、即ち詩的正義のために戦い続けるという構成の上に成立つものであるとし、それはクリスト自身、自分が「善き者」即ち絶対者でないことを承知していたからである、と、クリストの内部に立入って考察を進め、絶対者でない自分を知るが故に、あくまでその絶対者につながるために、神のため戦い続けてやまないという、絶対主義的生き方にクリストの確信は基いていると解釈する。この解釈には芥川自身の自己の限界の認識とやみがたき絶対への惱悦との投影が考えられる。それはこの作品以外にも「侏儒の祈り」（「侏儒の言葉」）の中や、遺文「或る旧友へ送る手記」の結尾などからもうかがわれることであるが、それはとにかく有限相対の人間がこの無謀ともいうべき絶対を夢想しての確信は、それが実現したとしても、虚栄心というものであり、結局このように未来を夢想して生きたクリストは超阿呆というより外ないのだということになる。「或阿呆の一生」で自分の生涯を否定的に振返っている芥川はここにクリストの身の程知らずの確信ぶりに超阿呆を感じ、脱帽し、感動せずにいられなかったものであろう。

10　ヨハネの言葉

「①世の罪を負ふ神の仔羊を観よ。我に後れ来らん者は我よりも優れる者なり。」――パプテズマのヨハネはクリストを見、彼のまはりにゐた人々にかう話したと伝へられてゐる。壁の上にストリンドベリイの肖像を掲げ、「こゝにわたしよりも優れたものがゐる」と言った、逞しい②イブセンの心もちはヨハネの心もちに近かつたであらう。そこに茨に近い嫉妬よりも寧ろ薔薇の花に似た理解の美しさを感じるばかりである。かう云ふ年少のクリストのどの位③天才的だつたは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高い④ヨルダンの芦のゆらゝかに星を撫でてゐるやうに。……

（注）

①「世の罪を負ふ……」　「ヨハネ伝」第一章・二十九・三

十に「明日ヨハネイエスの己に来るを見て曰けるは世の罪を任ふ神の羔を観よ我に後れ来らん者は我より優れる者なり蓋我より以前に在し者なれば也と我言しは此人なり」とある。

②イブセン　Henrik Ibsen（一八二八―一九〇六）

ノルウェーの劇作家。近代劇の始祖。個人主義的正義観をもって市民社会を批判、幾多の問題劇を発表した。作品「ブランド」「人形の家」「幽霊」「野鴨」「海の夫人」「民衆の敵」など。ストリンドベリイはスウェーデンの劇作家で、イブセンと同じ北欧の人で、年齢は二十一才ほどイブセンより下である。

③天才的だったは　天才的だったかは、が正しいであろう。

④ヨルダン　Jordan パレスチナにある河。流程約三二〇キロの大河。エリヤ、エリシャ、バプテスマのヨハネ等が、この川辺で予言活動をした。

（解）

「世の罪を負ふ仔羊を観よ。我に後れ来らん者は我よりも優れる者なり」（「ヨハネ伝・第一章」、「世の罪を取り除くためにつかわされた神の小羊を見なさい。つまりわたしのあとに来るかた、イエスこそは、わたしよりもすぐれたかたである。）――。〔聖書によれば〕バプテズマのヨハネはクリストを見て、彼のまわりにいた人々にこう話したと伝えられている。壁の上にストリンドベリイの肖像を掲げて、「ここにわたしよりも優れた者がいる」と公言した、心の小さくない（自分の心に打ち勝った）逞しいイブセンの心もちは〔ここに連想されるのであるが〕〔ここの〕ヨハネの心もちに近かったであろう。そこに〔例えて言えば〕とげとげしい茨に近いような嫉妬より寧ろバラの花にも似た理解の美しさを感じるばかりである。このような年少のクリストがどれ程天才的だったかは言うまでもない。が、しかし〔このようなおほらかな発言をした〕ヨハネも又この時にはやはり〔彼の生涯の中で〕最も天才的だったであろう。〔それは例えば〕丁度丈の高い（立派な）ヨルダンの蘆がやわらかく（やさしく）天上の星を〔愛と敬意をこめて〕撫でているような具合である。

（要旨）

本章の中心は、年少のクリストにめぐり会ったバプテズマのヨハネが心の底から救世主として敬愛してやまなかった。その謙虚な態度に対する芥川の強い感激を表現するところにあろう。彼はヨハネのクリスト理解の美しさに打たれ、「このときのヨハネはやはり最も天才的だったであろう」と、天才を知るものは天才であるとの感を深くしているのである。ところで、「このときのヨハネは」という限定が問題で、これは、正篇11章で「力を失った」ヨハネが「救世主はおまえだったか、わたしだったか？」と慟哭し、クリストにやり返されるといういたましい晩年を迎えているのを芥川は観ているからである。芥川がこ

こでいう「天才的」とは、「このときの」ヨハネの、エゴに汚されずに純粋な愛をもって濁らない透徹した理解力を発揮する能力についていったものであろう。この考え方は愛イコール理解の立場でもあろう。それはとにかく、早く彼は学生時代から、自他について、エゴイズムをはなれた愛の存在を疑い、生存意義の絶望を訴えている。大正4年3月9日の恒藤恭あての手紙はその一例である。それだけにヨハネの伝えるこの邂逅におけるクリストに対するヨハネの態度は彼に美しい感動をもたらしたのだと考えられる。

11　或町のクリスト

クリストは十字架にかかる前に彼①の弟子たちの足を洗ってやつた。「②ソロモンよりも大いなるもの」を以てみづから任じてゐたクリストのかう云ふ謙遜を示したのは我々を動かさずには措かないのである。それは彼の弟子たちに教訓を与へる為ではない。彼も彼等と変らない「人の子」だつたことを感じた為におのづからかう云ふ所業をしたのであらう。それはヨハネのクリストを見て「③神の仔羊を観よ」と言つたのよりも壮厳である。平和に至る道は何ぴともクリストよりもマリアに学ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。（カトリツク教はクリストに達する為にマリアを通じるのを常としてゐる。それは必しも遇然ではない。直ちにクリストに達しようとするのは人生ではいつも危険である。）或はクリストの母だつたと云ふ以外に所謂④ニウス・ヴアリュウのない女人である。弟子たちの足さへ洗つてやつたクリストは勿論マリアの足もとにひれ伏したかつたことであらう。しかし彼の弟子たちはこの時も彼を理解しなかつた。

⑤「お前たちはもう綺麗になつた」

それは彼の謙遜の中に死後に勝ち誇る彼の希望（或は虚栄心）の一つに溶け合つた言葉である。クリストは事実上逆説的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。

（注）

①或町の　　或時のの誤りであろう。

①彼の弟子たちの足を洗って……　「ヨハネ伝」第十三章・四―五、に「晩飯の席を起て上衣をぬぎ手巾を取て腰に束而して盤に水をいれ弟子の足を濯その束たる手巾にて拭はじめ……」とある。

②ソロモンよりも大いなるもの　「マタイ伝」第十二章・四十二、に「……夫ソロモンより大なるもの此にあり……」とある。

③神の仔羊を観よ　前章・（10ヨハネの言葉）注①参照。

④ニウス・ヴアリュ　news value（英語）報道価値。

⑤お前たちはもう……　「ヨハネ伝」第十五章・三、に「今

なんぢら我曰し言によりて潔なれり」とある。

（解）

クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足を洗ってやった。「ソロモンよりも偉大なるもの」と自分を任じていたクリストが〔人間の相対性、命のはかなさを痛感し〕こういう謙遜を示したことは我々を感動させずにはおかない。弟子の足を洗ってやったのは弟子たちに教訓を与えるためではない。クリストも弟子たちと同様な〔弱い〕「人の子」だったことを〔十字架にかかることとなって〕感じた為におのずとこういう所業をしたのであろう。この所業はヨハネがクリストを見て「神の仔羊を観よ」といった事よりも壮厳である。我々人間が平和な生活に入る方法はクリストによりもマリアに学ぶべきだ。そのマリアというのは、ただ現実に調和するために忍耐して生きて行った女だ。（カトリック教がクリスト精神を体得するためにまずマリアを理解すべきだとするのを常としているのは、いわれのない事ではなく、それは、直接クリストに結びつこうとしたらその人生はいつでも危険だからだ。）あるいはクリストの母というだけで、とりたてていう程のこともない女だ。〔弱い人間と自覚して〕弟子たちの足さえ洗ってやったクリストとしては〔母たる〕マリアの足もとにひれ伏したかっただろう。しかし弟子たちはこのときもクリストの心中を理解しなかった。（彼等はクリストは彼の道に従う者だけを愛するのだと、――マタイ伝十二章の48節以下のクリストの言葉などから――思いこんでいた。）

「お前たちはもうきれいになった。」

これは謙遜の言葉だが、この中には死後に勝ち誇ることを期している彼の希望（あるいは虚栄心〔現世しか信じられないわれわれからみたら、死後に勝ち誇りたい心などは負け措しみの虚栄心とも云えよう〕）が一緒に溶け合っている。クリストは実際、矛盾した云い方になるが、この瞬間は、弟子たちに〔へり下りの心情から云えば〕劣っていたと同時に、〔処刑されてもわが道の正しさで死後に勝ち誇ろうとする、その気構えの高さから云えば〕彼等に百倍もまさっていた。

（要旨）

前章で、クリストを見たヨハネが「神の仔羊を観よ」といったところに芥川は、ヨハネの最高の天才発揮を認めているが、本章ではその時のヨハネよりも壮厳なクリストを、死の処刑直前の彼の所業の中に見出している。それまでソロモンよりも偉大と自任していたクリストが弟子たちの足を洗ってやったのは、死に直面してはじめて、自分もまた普通の人と変わらない相対的有限的な弱小の存在たることを自覚しての謙遜からなのだとし、「超えんとするもの」のこの自己認識に芥川は深い人間的意味を見出し感動している。なお、この見方から「超えんとするもの」とは逆方向の、平俗な平和への道を歩む「守らんとす

る」平凡な母マリアの足もとにもひれ伏したかったのは無論であろうと「人の子」クリストの心持ちを忖度し、この心境は足を洗ってもらった弟子たちにも理解されなかったとする。そして「お前たちはもうきれいになった」といった謙遜な言葉の中に、芥川は死後の勝利への期待を読みとることによって、クリストはこの時弟子たちに劣っていたし、同時に百倍も優越していたのだと逆説的に断定するのである。

この逆説的な断定は、この時のクリストを矛盾した自己の認識者として芥川がとらえた点に基いている。そしてここで次章へとつながる。

クリストの有限弱小な人間自己認識に感動しつつも、それだけに死後に勝ち誇る希望――それはたとえ虚栄心だったにせよ――を最期においても抱き続けたクリストの生の逞しさを一層深く骨身に徹して感じているのである。

12　最大の矛盾

クリストの一生の最大の矛盾は彼の我々人間を理解してゐたにも関らず彼自身を理解出来なかったことである。彼は①庭鳥の啼く前にペテロさへ三度クリストを知らないと云ふことを承知してゐた。彼の言葉はその外にも如何に我々人間の弱いかと云ふことを教へてゐる。しかも彼は彼自身もやはり弱いことを忘れてゐた。クリストの一生を背景にしたクリスト教を理②解することはこの③為に一々彼の所業を「予言者X・Y・Zの言葉に應はせん為なり」と云ふ詭辯を用ひなければならなかつた。のみならず畢にかう云ふ詭辯の古い④貨幣になった後はあ⑤らゆる哲学や自然科学の力を借りなければならなかつた。クリスト教は畢竟クリストの作つた教訓主義的な文芸に過ぎない。若し彼の（クリストの⑦）ロマン主義的な色彩を除けば、⑥トルストイの晩年の作品はこの古代の教訓主義的な作品に最も近い文芸であらう。

（注）

①庭鳥の啼く前に……　本篇「4・無抵抗主義者」注①参照。
②理解することは　理解するためにはの意であろう。
③この為に　この矛盾のためにの意
④古い貨幣に……　用をなさなくなったものの意。
⑤あらゆる哲学や自然科学　譬えば、神話などについての哲学的意味づけとか、奇蹟の合理的説明などをさすであろう。
⑥トルストイの晩年の作品　「愛する所に神あり」「火を等閑にせば」「イワンの馬鹿」など、原始クリスト教精神に立脚した民話、小品の類。
⑦この古代の教訓主義的な作品　次章に明らかにしたように「新約聖書」を意味している。

（解）

クリストの一生の最大の矛盾は、彼が他の人間たちを深く理

解していたにも関らず自分自身を理解できなかった点にある。彼クリストは庭鳥の啼く前に弟子ペテロさえ三度クリストを知らないといって裏切ることを承知していた。聖書中に見られる彼の言葉は、そのほかにも、いかに我々人間が弱いかということを教えている。しかも、彼は彼自身もやはり弱いのだということを忘れていた。

クリストの一生を背景にしているクリスト教を理解するためには、この矛盾故に――彼も弱い人間の一人だということに気づいていなかったために――〔彼がふるまった向うみずの〕彼の所業を一々「予言者X・Y・Zの言葉に合致させんため」というコジツケの注釈で説明をしなければならなかった。そればかりか、こういうコジツケが〔通用しない〕古い貨幣となってからは、あらゆる哲学や自然科学の助けをかりて〔もっともらしい理窟づけをして〕体裁を装わなければならなかった。〔こうしたコネアゲに惑わされずに考えると〕クリスト教は究極的には、クリスト作の教訓主義的文芸にすぎない。〔つまりそれは宗教では決してない〕もし彼のロマン主義（生ま身の存在たることを忘れての理想へのひたむきな志向、情熱、夢見）的色彩（これが実はクリストのクリストたる所以）を除いたら、トルストイの晩年の作品はこの古代の〔クリストの〕教訓主義的な作品に最も近い文芸といえるであろう。（神ではない）人間的矛盾を内容とするクリスト教は、宗教ではなく、詩的正義を説く浪曼主義を生命とする古代の文芸であり、近代の文豪トルストイの作品はこれに最も近いが、その肝腎の浪曼精神という点に於て比較にはならない。

（要旨）

これまでのクリストの――前章の一節を除けば、それはクリストの一生のといってよかろう――最大矛盾は、人間の理解者でありながら自分自身を――わが身も同じく弱い人間であることを――忘れていたことだ。これを考えずに、クリストの一生を後楯にしたクリスト教を無理にも理解しようとするところから、彼の向う見ずな所業に一々詭弁を用いてもっともらしさを装おうようになり、それが通用しなくなると、クリストに無関係な哲学や自然科学の助けをかりなければならなくなったのだ。どうみたってクリスト教の本質は、「人の子」クリストが詩的正義を説くために作った文芸であって宗教ではない。前記の如き人間クリストの矛盾が土台となっている理想への不屈・無鉄砲な志向情熱の要素――これがクリストをクリストたらしめる生命――を除けば、トルストイの晩年の作品が最もこれに近かろう。

つまり芥川はクリスト教を理解することの困難さを、その中心人物クリスト自身の矛盾にありとし、前述の矛盾性を指摘した上に立って、クリスト教は文学にすぎないと規定して宗教とは云えないことをにおわしている。この非宗教性の判断の根拠をこの「西方の人」の中に求めると、正篇「37　東方の人」中

で、ニイチェの宗教「衛生学」説を肯定し、宗教の性質として「死ぬまで健康を保たせる」（同上）ことを考えているが、これとクリスト「最大の矛盾」とが相反するとした所にあるだろう。そしてこの矛盾の性質こそロマン主義的理想主義の文学精神の母胎であり、新約聖書は文芸なりとの規定に達したものであろう。

この章と、クリストは文学者なりとする次章とは、クリストと聖書についての、本書独自の創見の大胆な開陳として注目すべきところである。

13　クリストの言葉

クリストは彼の弟子たちに「①わたしは誰か？」と問ひかけてゐる。この問に答へることは困難ではない。彼はジャアナリストであると共にジャアナリズムの中の人物――或は「②譬喩」と呼ばれてゐる短篇小説の作者だったと共に「新約全書」と呼ばれてゐる小説的伝記の主人公だったのである。我々は大勢のクリストたちの中にもかう云ふ事実を発見するであらう。クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはゐられない一人だった。

（注）

①わたしは誰か？　「マタイ伝」第十六章・13・14・15・16に「イエス、カイザリヤピリピの方に到しとき其弟子に問て曰けるは人々は人の子を誰と言や、彼等いひけるは或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤまた預言者の一人なりと言り、彼等に曰けるは爾曹は我を言て誰とする乎、シモンペテロ答けるは爾はキリスト活神の子なり」とある。

②譬喩　ルナン「イエス伝・第十章」に、「師（イエス）は、殊に譬喩にすぐれてゐた。ユダヤ教中の何かが、彼に、このうまい様式の模範を示したわけでは、決してない。この様式は、彼の創作である。なるほど、仏教の経典中に、福音書の譬喩と全く同じ調子、同じ組立の譬喩がある。しかし仏教がこれに影響したとは認め難い。仏教と初代キリスト教とを一やうに生気づけてゐた温和の精神と、深い感情とは、おそらく、この類似を説明するのに十分であらう。」とある。

（解）

クリストは彼の弟子たちに「わたしはだれか？」と問いかけている。（マタイ伝十六章13～17節）一見むつかしげにみえるこの問いに答えることは困難ではない。クリストこそはジャアナリストであると共にジャアナリズムの中の人物――あるいは「譬喩」と呼ばれている短篇小説の作者だったと共に「新約全書」と呼ばれている小説的伝記の主人公だったのである。我々は大勢のクリスト〔文学者〕たちの中にもこういう事実を発見

するだろう。クリストも〔他の文学者同様〕自分の一生を彼の作品の索引とする（生涯を自分の作品に付属させ、作品の手引にする――続6参照）一人だった。

（要旨）

クリストに「わたしは誰か？」と聞かれた弟子たちは様々に答えているのに対して、芥川は彼は「時代に生きる文学者」であり、「新約聖書」なる作品の主人公であると答える形で、「新約聖書」を組立てているクリストの言葉に基いてそれを把握した前人未発のクリスト観を発表する。ここに芥川の詩（文学）観の根柢をなすものが人間としての生き方乃至態度にあったことが考えられ、芥川の文学が態度美学として論じられる所以もうなずかれるのであって、「大勢のクリストたちの中にもこういう事実を発見」できるとしたり、「クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはいられない一人」と見たのも、芥川の態度美学的文学観のあらわれとすることで理解できよう。

なお、態度美学とは、人生の価値（美しさ、尊さ）は、他を一切顧みず、自己の真実・信念を積極的に生き抜く態度にありとする浪漫的哲学である。理想主義的だった芥川は早くから、現実人生の絶対的なものを知識的に客観的に探ろうとして、幻滅（虚無、懐疑）に追いこまれたところから、成否はとにかく、ひたむきにそれを求めて生きる態度だけを生の価値として観るようになった。彼の文学観がこの人生観に基くものであることを理解すれば、彼の文学の立場をいわゆる芸術至上（芸術のための芸術）主義として片づけることの妥当でないのは明白であろう。なお、岩波の新書版全集第15巻所収「アフォリズム」中の「善い芸術家」なる一文「善い芸術家以上の人間でなければ、善い芸術を作る事は出来ない。このパラドックスを呑込まない限り、『芸術の為の芸術』は永久に袋露路を出られないであろう」は、彼芥川自身この問題に答えるものであろうことを付記する。

（本学教授―国文学）
（本学講師―国文学）